現代の知識人とは、いかなる人物か

鈴　木　宜　則＊

（2008年10月30日　受理）

The Qualities of Modern Intellectuals

SUZUKI Yoshinori

I　問題の所在

西洋の古代・中世・近代に、いわゆる知識人が存在した事は、言うまでもない事であろう。例えば、ソクラテス・プラトン・アリストテレス・アウグスティヌス・トマス・アクィナス・ダンテ・エラスムス・マキアヴェッリ・トマス・モア・ボダン・ホッブス・ロック・ヴォルテール・ルソー・ヒューム・アダム・スミス・ベンサム・J. S. ミルらがこれである。

近代を準備した中世の場合、アラン・ド・リベラによれば、知識人とは、次のようなものであった。すなわち、「13世紀における知識人の出現は、西欧の歴史にとって決定的な契機であった。この現象は歴史家によって社会学的に十分に記述されてきたが、それを哲学的に評価するという仕事が残っている。中世は、『大学人』という新しいタイプの人間を発明したと言われる。しかし、中世の大学はもはやないし、神学の争点も変わってしまった。この発明が、いまだにわれわれにとっての重要性を持ちうるとしたら、それはいかなる点においてであろうか。・・・＜近代知識人の役割は批判であり、その点で知識人は大学人から区別される＞。今日、現実としてこうした簡単な仕方で定式化されているような＜分業＞が存在するが、中世の大学は、こうした分業の確固たる出発点だった。知識人は社会変化に参加する役者であるが、大学人はこの芝居の無関心な観客である」(1)。

リベラは、これに付け加える。「知識人が知識人であると分かるのは彼が与えるものと彼が受け取るものとの隔たりによるのであって、この隔たりは知識人以外のだれにも真似ができない。」(201頁)、と。

また、「純潔者、利己主義者、[精神的] 貴族—すなわち自分自身の神的な部分（思惟）を選択することによって高貴にされた者。シゲルスの言う『知識人』はこんな具合に、色々に表現できるだろうが、いずれにせよ、それは言葉の十全の意味で知性（インテルロクラット）に支配された人々である。そこにはエンクラディス主義の逆説的勝利もなければ、性的悲観主義もなく、聖職至上主義もなく、ある

＊　鹿児島大学教育学部　教授

のは『アリストテレス主義』という名を持つギリシア哲学の主知主義的傾向の復活であり、意思表示なのである。ダンテが『饗宴』の中で称揚したのがこうした生の企画である。それは急進的アリストテレス主義の憲章なのだ。」（255-6頁）、とリベラは主張する。

更に、リベラによれば、「中世の知識人を定義するものは、聖職者および俗人の主知主義—すなわちアリストテレス主義の長い持続—であって、教会風の反主知主義ではない。アリストテレス的倫理の再生が、後期中世の哲学にその固有の布置を与えているのであり、1277年の検閲は、逆説的に、この再生のこの上ない証人であり、最良の布教活動であったわけだ」（276頁）。その上、リベラは、自分の研究の限界を告白している。すなわち、「中世において自分を知性の人間と定義していた人々のみを『知識人』と呼ぶことによって、われわれはまず最初に、われわれの［研究］領域を、歴史的に限定された一定の類型の個人に限定した。その筆頭には、或る時は『急進派』、在る時は『異端』、或る時は『完全人（アンテグラル）』と呼ばれ、たんに『パリッ子』とだけ呼ばれることもあった、あの『アリストテレス主義者』がくる。・・・われわれの中世知識人観は依然として部分的なままである。」（400頁）

最後に、リベラは、中世の知識人について総括する。「われわれが見る限りでは、知識人の中世は利己主義（エゴイズム）の発明と同時に、我（エゴ）の消去によって特徴づけられる。外見上は矛盾しているこうした二重の運動の中にこそ、『中世知識人』現象の社会的かつ哲学的な真の次元が宿っている。しかし人がこの事態をアリストテレス主義の長い持続と倫理学の歴史の中に置き戻す時、矛盾は純粋に外見上のものであることが明らかになるだろう。」（407頁）、と。

次に、アーサー・G・ギッシュによれば、ルネサンスになると、ボヘミアのフスは、キリスト教の研究に取り組み、その結果、ウィクリフの影響も受けて、世俗化したカトリック教会には限界がある事を明らかにし、聖書中心の教説を展開した宗教改革者となった(2)。これらの事から読み取れるのは、中世やルネサンスの知識人が既成の社会諸制度の批判者だったという事である。しかし、その見方については様々な立場がある。

現代に入ると、例えば、ジョゼフ・ラウズによれば、「もはや中心的な問題は、科学的主張がどのようにして論争・宣伝・イデオロギーによって歪曲され抑圧されるかということではない。むしろ、以前は知識の適用を通じた権力の獲得というふうに記述されたものが、実際には何であるかに目を向けねばならない。しかし、さらに、新経験論は『適用』に関して、こういった言い方の妥当性に挑戦している。既存の見解では、知識の創造とその後の適用——権力は適用に由来する——は区別される。それに対して、科学に関する新経験論的説明は、正確な表象から事象をうまく操作したり制御することに知識の場を移すことによって、こうした区別をあいまいにする。もはや権力は知識の外にあるのでもなければ知識に反対するのでもない。権力それ自体が知識の徴となるのである。」(3)

ラウズによれば、「行動の領野は、物質的な環境や技術的な能力と、こういった環境において何をなし何であることが意味を持つかに関する共有された理解の両方によって構成される。科学

的実践は、それが右に述べた両方の仕方でわれわれの可能な行動の領野を組み立てるのに役立つという意味で政治的である。科学的実践は、われわれの物質的環境や技術的能力を了解可能なものにする概念や実践を形成するのに役立つ（そしてそれらによって形成される）。選挙や暴動や立法が政治的であるという意味で科学研究〔科学的実践〕を政治的と考えるのは間違っているだろう。しかし、科学は、狭く定義された政治がその中で生起する実践的布置に影響を及ぼす（そして実践的布置によって影響を受ける）という意味では政治的である」(4)。

しかしながら、L・コーザーによれば、「数ある現代用語のなかでも、『知識人』(intellecual) という言葉ほど曖昧なものはあまりない。」としつつも、「・・・知識人とは、あるがままの事態にはけっして満足せず、慣習や慣例に頼ることをいさぎよしとしないような人間だということである。したがって、彼らは、ヨリ崇高で高遠な真理に立脚しながら、当面真理とされているものに疑問をなげかけ、『現実離れのした当為』、つまり普遍的理念に基づく至上命令を喚起しながら、眼前の事実世界に依拠するという態度に一撃を加えるのである」(5)。

また、カレル・ヴァン・ウォルフレンによれば、「知的な誠実さ（インテグラルインテグリティ）を何よりも尊しとする姿勢こそ、知識人のきわだった特徴である。人が知識人であるがためには、独立不羈の思索家（シンカー）［訳注－思索家、思想家を含め、『考える人』全般を指している］でなくてはなら」ず、その「機能の一つは、彼ら庶民（「日本の国民一般」。筆者）の利益を守ることにある」のだが、「日本では、知識人（インテレクチュアルズ）がいちばん必要とされるときに、知識人らしく振る舞う知識人がまことに少ないようである」(6)。

更に、ウォルフレンによれば、「わが身にどんな結果が降りかかろうとも、あくまで“筋を通（ストレート）して”考えることを自らの責務とする人々の意見は、これが権力の行使のされ方に関連する問題を取り上げたものである場合、もっとも価値が高くなる。権力行使のあり方こそ、日常の社会生活面で我々に影響を与える。他のすべての事柄を決定づけるからだ。言いかえれば、知識人は、政治問題を詳しく説いてもらうために最も必要とされるのである。我々の自由が無用に縮小されたり、権力を保持する者がその支配下にある万人を災難に追い込んだりしないよう取り計らううえで、知識人こそ我々の持てる最大の希望である。独裁政権と知識人の間では、必ずと言っていいほどに争いが起こるのも、決して偶然ではない」(7)。

中世・近代の知識人の役割は、既成の諸制度や慣習の批判・改革者であった。それでは、世界化が進み、地球大の問題が山積している現代の知識人は、どういう特徴と能力を持ち、また、何をなすべきなのであろうか。これらの点を明らかにする事が、本論文の目的である。その際、ポール・ジョンソン、エドワード・サイード並びに森　有正の知識人論を参考のため取り上げる。これらを論じる前に、現代の知識人と密接な関係のある近代の知識人についても触れておきたい。その際、体系的に論じていないラウズ・コーザー・ウォルフレンの主張は、参考にするに留めたい。

なお、叙述の精確さを期するために、引用を多用する事を予め断っておきたい。

Ⅱ　ポール・ジョンソンの近・現代知識人論

ポール・ジョンソンによれば、「この2百年の間に、知識人（インテレクチュアルズ）の影響力は着実に大きくなってきている。現代世界の形成にあたって主な要因となったのは、世俗の知識人の出現で、歴史を長期的な視点で眺めると、これは多くの点で新しい現象だといってよい」[(8)]。

ジョンソンによれば、「新しく現われた世俗知識人のきわだった特徴は、宗教とその指導者を好んで批判したことである。信仰の大組織はどれほど人類のためになったのか。あるいは害になったのか。教皇や司祭はどの程度、清廉と誠実、愛と慈悲の教えに恥じない生活を送ったのか。教会と聖職者双方に下された評決は厳しかった。それから2世紀が過ぎ、その間宗教の影響力は衰えつづけ、世俗の知識人は人びとの行動基準や制度を形成する上でますます大きな役割を果たしてきた。今や、知識人の記録を、公私両面にわたって、審理すべき時である。特に私は、人類にいかに身を処すべきかを教えた知識人の、倫理、判断に関する資格の有無に焦点を当てたい。彼ら自身はその人生をどう生きたか。家族や友人、仲間に対してどの程度正しくふるまったか。異性関係、金銭問題に不当なところはなかったか。いったい真実を語り、書いたのか。彼らの打ち立てた体系は、いかに時と実践の試練に耐えてきたか。」（12頁）として、その個人的な生活をも問題にしている。

彼の立場は、「人びとにいかに身を処すべきかを教えている一流知識人が、道徳や判断の面で果たしてその資格があるのかどうかを吟味するものである。事実にもとづき、感情に走らないことを旨とし、できる限り当面の人物の著作、書簡、日記、回想録、講演記録を使用した。」（2頁）、というものである。

彼が『インテレクチュアルズ』において取り上げた近・現代の知識人は、ジャン＝ジャック・ルソー、シェリー、カール・マルクス、ヘンリック・イプセン、トルストイ、アーネスト・ヘミングウェイ、ベルトルト・ブレヒト、バートランド・ラッセル、ジャン＝ポール・サルトル、エドマンド・ウィルソン、ヴィクター・ゴランツ、リリアン・ヘルマン、オーウェルからチョムスキー等である。これらの知識人の中で近代に属するのは、トルストイまでであろう。ここでは、これらの知識人の中で、ルソー・マルクス・ラッセル・サルトルの4人を取り上げたい。その理由は、彼らが一般に近・現代の知識人と見なされ、社会に大きな影響を与えたからである。

ジョンソンは、「新しく現われた世俗知識人のきわ立った特徴は、宗教とその指導者を好んで批判したことである。信仰の大組織はどれほど人類のためになったのか、あるいは害になったのか。教皇や司祭はどの程度、清廉と誠実、愛と慈悲の教えに恥じない生活を送ったのか。教会と聖職者双方に下された評決は厳しかった。それから2世紀が過ぎ、その間宗教の影響力は衰えつづけ、世俗の知識人は人びとの行動基準や制度を形成する上でますます大きな役割を果たしてきた。今や、知識人の記録を、公私両面にわたって、審理すべき時である。特に私は、人類にいかに身を処すべきかを教えた知識人の、倫理、判断に関する資格の有無に焦点を当てたい。」（12頁）、

と言う。

1．ルソー　「おもしろい気ちがい」

ジョンソンによれば、ルソーは、「最初の近代知識人であり、原型であり、多くの点で、もっとも影響力のある人物。・・・既存体制をことごとく否定する権利があるという主張、自分の考えた原則に従って、体制を根本からつくり直すことができるという自信、それを政治的な方法でやりとげることができるという信念、そしてとりわけ、本能、直感、衝動が人間の行動に大きな役割を果たすという認識。彼は人間に対してたぐいまれな愛情を持っていると信じ、人間の幸福を増大させるための、空前の才能、洞察力がそなわっていると自負していた。」(12-3頁)そして、「ルソー自身によるこの自己評定に従ってルソーを評価する人は、同時代にも、それ以後も、驚くほど多い。」(13頁)

ルソーは、長期間に亘って人びとの従来の文明観を次の5つの主要事項について一変させた(13-5頁)。第1に、自然を強調し、「現代の教育観は全て、特に、彼の論説『エミール』(1762年)の影響をいくらかでも受けている。」第2に、彼は、「理性それ自体には、社会を直すための手段として限界があるとも主張」し、「物質主義文化のゆるやかな発達がもたらす漸進的な改良に対する不信を説いた。」第3に、彼の「仕事は、ロマン主義運動と、現代の告白文学、両方の始まりとなった」。第4に、「社会が原始的自然状態から、都会的洗練へと進展するとき、人間は堕落する」、とルソーは主張した。第5として最後に、彼は、「産業革命の直前に、資本主義を批判する原理を展開し」、『不平等起源論』などの中で、「財産と、財産を得るための競争が疎外の主原因であることを示した。」

「ルソーは、くり返し自分は全人類の友達だと宣言した最初の知識人である。」(24頁)、と述べたが、しかし、彼は、「虚栄心が強く、自己中心でけんかっ早い。それなのにたくさんの人がその味方をするのはなぜだろうか。この問いに答えることは、ルソーの性格と歴史的な意味の核心に迫ることにつながる。一つには偶然から、一つには本能から、また一つには計画的な企みから、ルソーは、特権階級の罪の意識を徹底的に利用した最初の知識人だった。それも、まったく新しいやり方で、故意に粗野を礼賛することによって行なったのである。」(24頁)「世間受けが――それも服装や外見のとっぴさのおかげであることが少なくないが――多くの知識人指導者の成功の重要な要因となるのは、ゆめおろそかにはできない事実である。ルソーはこの点においても、多くのことと同様に先頭を切っていた。」(26頁)

2．マルクス　とほうもない毒舌

ジョンソンは、マルクスの言動を以下のように解釈している。「近代知識人の中で、カール・

マルクスほど、人びとの精神のみならず、現実の事柄に強い影響を与えた人物はいない。それは彼の思想や方法論にひかれたからではなく――もちろん、物事を厳密に考えない人間にはそのいずれも魅力たっぷりではあるかもしれないが――主として、彼の哲学がソ連と中国という世界の２大国、およびその多くの衛星国で制度化されたという事実による。」（89頁）

マルクスによれば、「ほかの哲学はすべて、科学的ではなく、そうあり得もしないが、マルクス主義だけは科学的だという考えは、マルクス主義の信奉者が築いた国ぐにの公式教義にとりこまれ、その学校や大学にあまねく影響を与えているのみならず、マルクス主義を掲げていない世界にまであふれ出している。というのも、知識人、ことに学者は力に魅せられるもので、多くの教師はマルクス主義と強大な物理的権力とを同一視して、自身の学問分野、特に経済学、社会学、歴史学、地理学といった厳密さを要求されない、あるいはそれほど厳密とはいえない学問にマルクス主義の『科学』性を持ち込もうとしたからである。」（89-90頁）

「マルクスには三つの側面がある。詩人、ジャーナリスト、モラリストである。それぞれが重要な側面であり、三つがいっしょになり、それに人並みすぐれた意志とがあいまって、すぐれた書き手とも予言者ともなったが、科学的なところはまったくない。それどころか、かんじんな点ではきまって反科学的ですらあった。」（92頁）「1856年4月14日の戦慄的な演説にも、詩に歌われた終末論的なことばが顔をのぞかせている。『歴史は審判、その執行者はプロレタリアート』。恐怖、赤い十字のつけられた家々、破滅的なメタファー、地震、口を開けた地殻から沸き立つ溶岩。問題は『最後の審判の日』についての彼の考えが、恐ろしげな詩の形をとっていようと、結局のところは経済学説であろうと、決して科学ではなく、芸術的ヴィジョンだという点にある。」（93頁）

「マルクスの最大の才能は論客という点にあった。絢爛たる警句や金言の使い手だったが、多くは自分で作り出したものではない」（94頁）。彼は、マラーやハイネ、ルイ・ブラン、カール・シャッペル、ブランキの文章から借りてきた（94頁）が、「他人が語ったことばに磨きをかけ、ここぞという時に寸鉄人を刺す組み合わせで使うという才能にもめぐまれていた。政治を専門にする書き手で、『宣言』の三つの文章を超える文章をものした者はいない。『労働者には、鎖のほかには失うものは何もない。彼らが手に入れるのは世界である。万国の労働者よ、団結せよ！』。」（95頁）

「詩心が作品にヴィジョンを与え、ジャーナリスト的金言が作品のハイライトをなすにしても、その根底にあるのはわけのわからぬ学者のジャーゴンである。マルクスは学者、というより、もっと悪くて、なりそこないの学者だった。気むずかし屋で、大物気取りのマルクスの望みは、哲学の新しい学派をつくり出して世間をあっと言わせることだったが、それはまた、みずからが権力をにぎるためでもあった。そこから、ヘーゲルに対する相反する態度も生まれたのである。」（95頁）

マルクスは、見識のあるエンゲルスから誘われても、産業の現場に足を運び、労働者や農民、地主と会って直に話をするという本当の革命家に求められる、姿勢や態度を持ち合わせてはいな

かった（100-1 頁）。更に驚くべきは、彼は、労働の「経験を持った仲間の革命家――つまり政治に目覚めた労働者に冷淡だったことである。」（101 頁）。彼らは、「社会を変えたがってはいるが、そのための実際行動を起こすことには消極的である。・・・マルクスは彼らを軽蔑した。ただの雑兵、それだけのこと。好んでつき合ったのは自分と同じような中産階級出身の知識人だった。・・・エンゲルスとともに共産主義者同盟を、そしてその後インターナショナルを結成したときも、労働者階級出身の社会主義者は影響力のある地位から排除し、たんなる規則に定められた員数合わせに委員会に加えただけだった。そうした態度は、一つには知識人の気どりのせいだが、また一つには工場の実情を身をもって経験している人は、反暴力の立場をとり、おだやかで漸進的な改革を望む傾向にあるということからきている。彼らは、必要にして不可欠だとするマルクスが主張する終末論的革命には、賢明にも懐疑的であった。マルクスのもっとも悪意に満ちた非難は、こうした人たちに向けられている。1846 年 3 月、マルクスはヴィルフェルム・ヴァイトリングを、ブリュッセルの共産主義者同盟の会合で、裁判ともいえる形で糾弾した。・・・ヴァイトリングは反論する。自分は書斎ででっち上げられた理論を学ぶために社会主義者になったのではない。現実に働く人間のために語ったのであり、現実の労働のきびしい世界からかけ離れたところにいるただの理論家の見解を甘受するつもりはない、と。・・・その後、労働者階級出身の社会主義者や、理論による革命よりも労働と賃金といった現実問題に実際的解決策を説くことで多数の労働者の支持を獲得した指導者全てに向けられた攻撃は、これと軌を一にする。・・・こうしてみるとマルクスには産業界の労働条件を自分で調べるとか、それらを身をもって体験したインテリ労働者から学ぼうという気などまるでなかったのだ。・・・ヘーゲルの弁証法を使って、1840 年代の終わりには人類の運命について、肝心なところはすでに結論が出ている。あとはそれらを実証する事実を見つけるだけ。それは新聞記事、政府の出す青書、あるいは昔の書き手が集めた事実などから仕こめばいいし、すべて図書館へ行けば見つかる。それ以上のことがどうして必要なんだ？要するにマルクスの見るところ、問題は正しい事実、つまりぴったりあてはまる事実を見つけることだった。・・・こうした点から見て、『事実』はマルクスの著作の中心をなすものではなく、それとは無関係にすでに出された結論を補強する副次的なものだった。従って、学者マルクスの生活の営みの中心ともいうべき記念碑的な述作『資本論』は、経済過程の性質を科学的に調査したものと称してはいるが、むしろ道徳哲学の習作、カーライルやラスキンの著作と似たような論文と見るべきである。」（101-4 頁）とジョンソンは、マルクスを批判している。

また、ジョンソンは、「資料はほとんどが、1860 年代初め、つまりマルクスが第 1 巻に取り組んでいた、その同じ時期に集められたものである。そうしてみると、『資本論』をマルクス自身が本として完成させるのに妨げになるものは何一つなかったはず。あるとすればエネルギーが欠けていたことと、そしてまるっきり首尾一貫していないことがはっきりしていたことぐらいだろう。」（105 頁）、と酷評している。

更に、マルクスは、父親が死んでも葬式にすら出かけず、政治的な意味合いで行った断続的な

ジャーナリストの仕事を除けば、真面目に仕事に就こうとした事は一度もなかった（120頁）。その上，ジョンソンによれば、マルクスの「怒りっぽい自己中心的な性格は精神的なものだけでなく、肉体的なものにも根ざしている。マルクスは格別不健康な生活を送っていた。」（119頁）しかも、マルクスは、生業に就かず、エンゲルスらに頼り、極貧の生活を送る事さえあった。しかし、マルクスには不思議な魅力があり、それは、彼の痛烈で辛辣なユーモアであり、彼の妻や娘達を結び付けたのは、何よりも、彼のジョークだった（123頁）。そのため、「イギリスの生活は安全だが、零落したのもたしかだった。ジェニー、ラウラ、エトガルと3人の子どもがいる上に、1849年11月にはガイ、あるいは グィドウという4人目が生まれた。5カ月後、一家は家賃が払えず、『チェルシー中のやじ馬が群がる』前で（とイェニーは書いている）・・・一家はレスター・スクウェアのドイツ人経営のむさくるしい下宿屋に身を寄せ、そこでその冬、赤ん坊のグィドウを死なせた。イェニーはこの絶望的な日々の体験を書き残しているが、その痛手から、イェニーの心もマルクスに対する愛情もその後、決して回復することはなかった。」（124頁）

このように、ジョンソンによれば、マルクスには、学問的にも、活動家としても、性格的にも、生活面でも重大な欠陥がある近代の知識人だったのである。

3．バートランド・ラッセル 「屁理屈屋！」

ジョンソンによれば、「史上、バートランド・ラッセル、第3代ラッッセル伯爵（1872-1970年）ほど長きにわたって人類に助言を与えてきた知識人もいない。」（315頁）「その間に出版した著書は、幾何学、哲学、数学、司法、社会改革、政治理念、神秘論、論理学、ボルシェヴィズム、中国、頭脳、産業、原子のABC（1923年核戦争の本が世に出たのはその36年後）、科学、相対性理論、教育、懐疑論、結婚、幸福、道徳、怠惰、宗教、国際問題、歴史、権力、真実、知識、権威、市民権、倫理学、伝記、無神論、知性、未来、軍縮、平和、戦争犯罪、などなどの分野に及ぶ。これらに加えて、新聞や雑誌に載った記事も大量で、考え得るかぎりのありとあらゆるテーマを取りあげている。口紅のつけ方、旅行者のマナー、たばこの選び方、妻虐待というのまである。」（315頁）

「彼の考えでは、知性の大祭司にはエレウシラスの秘儀を自分たちの階級にとどめておく使命がある一方で、蓄えられた知識をもとに、知識の果実を消化しやすい形で一般大衆にふるまう使命もあると見る。かくて専門哲学と大衆倫理の間にはっきりと一線を画し、両者を実践する次第となった。」（318頁）研究と教育に30年間近く従事した後、「それ以上に長い時間、大衆相手に何を考え、何をなすべきかを語り、その英知の伝道が長い人生の後半を完全に占めた。」（318頁）

その間、ラッセルは、反戦運動に関与し、罰金刑や禁固刑を科されている（319-21頁）。「こういった事件でラッセルの大衆に対する考えが実際に前進したかどうかは疑わしい。しかしそれは、彼が誠実で哲学を象牙の塔から市井にもたらす意欲をもっていることを証するものではある。・・・

実際は、ラッセルが世間に哲学を持ち込んだという考えは、はなはだ誤解を招くものである。むしろ彼は、結局失敗したが、現実の世界を哲学の中に押しこめようとして、それが合わないことを悟ったといったほうがいい。」（321 頁）

また、「ラッセルは人びとが実際にどんな行動をするかを知らなかっただけではない。自己認識もまったく欠落していた。自分自身の特徴がレーニン（『人民を軽蔑する特権階級的知識人』）に重なることがわかっていない。さらに重大なのは、一般の人びとが非理と感情の力に流されていると嘆く当の自分がそうであることを、まったく意識していないのである。世間の諸悪は、理論、理性、節度によって大方解決できるというのがラッセルの一貫した態度だった。男も女も感情に走らず理性に従い、直感に頼らず論理をもって語り、極端に偏らず節度を保つなら、戦争など起こるはずもなく、人間関係は円満になり、人類を取り巻く状況は着実に改善されるだろう、と。・・・さすがに彼も人間性にかかわる問題が方程式のように解決できると思うほど愚かではなかったが、それでも、時間、忍耐、方法、節度をもって取り組めば、人間の公私にわたるどんな困難な問題も論証が答えを出してくれると信じていた。哲学的に冷静に対処することは可能だと確信していた。とりわけ、論証と論理の枠組みが正しければ、大多数の人間はきちんとした行動ができると考えていた。」（322-3 頁）

「困ったことにラッセルは、上述の主張がすべて不確実な基盤の上になりたっていることを、自分自身の人生を舞台に次から次へと証明してくれている。重大な転機が訪れるといつも、彼の見解や行動は理性よりも感情によって決定される傾向が強かった。危機に直面すると論理は支離滅裂になる。利益が脅かされるようなときには、正しい行動をとるとはとても保証できない。弱点はまだほかにもある。人道主義的な理想論を説くにあたっては、ほかのなによりも真実に重きを置く。しかし窮地に追いこまれると、うそをついて言い逃れをしかねない――どころか、たいていそうなる。正義感が踏みにじられ、感情が高ぶると、正確さなどどこへやら、特に彼にとって困難だったのは、理知と論理を追求する以上なくてはならない一貫性を保つことだった。」（323 頁）

「おそらくほかのどんな問題よりも勢力的にこの問題（「戦争と平和の問題」。筆者）に取り組んだことはまちがいない。ラッセルは戦争を非合理的な行為の格好の例証とみていた。二つの世界大戦と小さな戦争の時代を生きてきて、戦争と名のつくものすべてを嫌った。その戦争を忌み嫌う気持ちはまったく純粋だった。1894 年、ローガン・バーサル・スミスの姉アリス・ホイットルと結婚したが、彼女はクェーカー教徒で、その心優しい信心深い平和主義が彼の頑固な、そして（彼に言わせれば）論理的な平和主義をさらに強固なものにした。1914 年、戦争が勃発すると真っ向から反対する意思を表明し、大西洋の両側に平和を取りもどすため、我が身の自由と仕事を危険にさらしながら、力の限りを尽くした。しかし投獄の原因になった発言はとても平和的で理性的な節度ある人間の口から出たものとは思えない。平和主義を擁護した優れた哲学声明書『戦争の倫理』（1915 年）では戦争は決して正当化されないと論じており、けっこう論理的だっ

た。しかし彼の平和主義たるや、当時もそれ以降も闘争的とは言わないまでもかなり感情的な要素が見られる。」（323-4頁）

「ラッセルは戦争を忌み嫌ってはいたのだろうが、暴力を好む時期もあった。彼が唱える平和主義はときとして攻撃的で、好戦的とさえ思われる。・・・完全な解決を信じるある意味で絶対論者だったということである。一度ならず何度も、世界の恒久平和の時代はまず強力な政治手腕をもって無理やり実現させるものであるという考えにたちもどっている。・・・最初にこの考えを思いついたのは第1次世界大戦も終わりに近づいたころ、軍備縮小をはかるためにアメリカはその強大な力を行使すべきだと言い出したときだった。・・・やがてアメリカが核兵器の独占を手にしていた1945年から49年の間、この提案はおそろしいほど強力に再び推し進められた。後になってラッセルは当時の見解を否定しようとしたり、ごまかしたり、言い逃れをしたりしているので、ある程度細目にわたって年代順に整理しておく必要がある。彼の伝記を書いたロナルド・クラークが明らかにしているように、ラッセルがソ連に対する予防戦争を提唱したのは一度ならず何度もあり、それも数年にわたっている。」（324-5頁）「多くの左派系の人たちと異なり、ラッセルはソヴィエトの社会体制に丸めこまれるようなことは決してなかった。常にマルクス主義を徹底的に退けた。1920年ソ連を訪問した際に著した本『ボルシェヴィズムの理論と実践』ではかなり手厳しくレーニンとその所業を批判している。スターリンを怪物と見、強制集団農場化、大飢饉、粛正、といった西側には伝わった断片的な話をそのまま真実と受けとった。どこから見ても急進的なインテリゲンツィアにはほど遠い。1944年から45年にかけて、ソ連の支配が東ヨーロッパの大半に及んだとき、これを認めて彼らとともに この喜びを分かち合うこともなかった。ラッセルにしてみればそれは西側文明にとっての大災害だった。『私は身の毛がよだつほどソヴィエト政府が嫌いだ』と1945年1月15日に書いている。武力を行使するか威嚇するかして阻止しなければソ連の拡張はづづくと信じていた。・・・史上はじめて核兵器がアメリカの手で日本に投下されたとき、アメリカは新しい武器を使ってしぶといソ連をおさえつけ、全世界に平和と軍備縮小を強いるべきだという見解を即座に復活させた。」（325-6頁）

これは、世界平和のために 武力を行使する事もありうるという見解であるが、ラッセルが敵国の人びとを核兵器によって何世代にも亘る大規模な被害を与えても良いという自陣営偏重の利己的な思想の持ち主であった事を雄弁に物語っている。

一方では、「ヨーロッパをソ連の蹂躙にまかせたら、その後再征服しても元に戻せないほど破壊されてしまうでしょう。現実に、教育を受けた者は全員北シベリアの強制収容所か白海の沿岸におくりこまれ、ほとんどの人が辛苦に耐えられず死に果て、生存者は獣と化すでしょう。原子爆弾は、もし使われるとすれば、まず、最初にヨーロッパに落とされることになります。ソ連は遠くて届きませんから。ソ連は原子爆弾を持っていなくてもイギリスの大都市を全部破壊するくらいの力はあります。・・・最後にはアメリカが勝つことを信じてやみませんが、西ヨーロッパを侵略から守れなければ、何世紀にもわたって文明からおさらばすることになります。このよう

な代償を払うにしても、戦争はするだけの価値があると私は思うのです。共産主義を一掃しなければならないし、世界政府を樹立しなければならないからです。」(327頁)

これによって、ラッセルが、多大の犠牲を払ってでも共産主義社会を壊滅させ、資本制国家同士による世界政府を構想していた事が分かる。

しかし、「1953年10月、『ネーション』紙で『ソ連に対する予防戦争を支持したこと』を否定し、話はすべて『共産主義者の作り話だった。』」と書き、これを否定している。(328頁)「ラッセルの口から出るものは、人間性が無視されて論理ばかりが先走り、理性的であるべき議論が過激になってしまった格好の例である。ここに、まさしく、ラッセルの欠点がある。彼は、いかにことに処すべきかを人びとに語るとき、論理の命じるところに過った価値を付加し、常識の直感的なひらめきを踏みにじってしまうのだ。」(329頁) 同様な事は、次のような見解の変化にも現れている。

「1950年代半ば以来、ラッセルは、核兵器は本質的に邪悪でいかなる状況でも使ってはならないと考えたが、それもこの伝で、つまるところ論理の恐ろしげな鳴き声にひきづられるまま、まったく別の——しかし同様に過激な——方向へ突進してしまったのである。ビキニ環礁の水爆実験について、1954年に行われた『人類の危機』という放送では、まず、核兵器反対を宣言した。それからさまざまな国際会議だの声明文だのが行なわれ、ラッセルの思考路線は、いかなる犠牲を払っても全面的な廃絶をするという方向に固まっていった。」(329頁)

市民不服従運動を組織する計画を持ち、ラッセルの秘書になったシェーンマンは、百人委員会やヴェトナム戦争犯罪裁判、バートランド・ラッセル平和財団に大きく関与し、恐らく彼の代筆もしたが、役に立たなくなると、ラッセルは、シェーンマンと関係を絶った(346-50頁)。

また、ラッセルは、「当時の女性解放論者が述べているような女性の権利を擁護する説を支持した。婚姻上にしろ婚姻外にしろ、女性に対する平等を要求し、女性は倫理的には何の根拠もない古くさい制度の犠牲者だと言う。性的な自由は享受されなければならないと述べ、昔から美徳という名のもとに守られてきた禁忌の掟と人身御供を手厳しく批判した。」(336頁) 事実、彼は、女性関係にもだらしなかった(337-46頁)。「ラッセルは年をとるにつれ、・・・ますます好色になり、自分の都合のよいときだけしか社会の法則に従わなくなっていった。」(337頁)

更に、ラッセルは、物理的な現実から隔たっており、誰にでも出来るようなごく簡単な日常の雑用すらできなかった。例えば、彼の妻が外出する際に書き置きをしておいたお湯の沸かし方もできなかった。また、晩年、補聴器を使う時でも、誰かの手伝いが必要だった(321頁)。その上、人間界の諸事にも疎く、例えば、「物質界だけでなく人間界の諸事にもたえず挫折させられた。・・・『知識人は常に真実を愛するものと思っていたのだが、これまた人気よりも真実を好むものは一割にも満たないことを発見した』と書いている。こんなふうに腹立たしげに書いていること自体、・・・普通の人間が起こす感情の動きにまったく無知だったことをさらけ出していて、また何をか言わんやである。彼の自叙伝にはこの種の記述がたくさん見られ、ラッセルほどの賢

人が人間の本性をまったく理解していないことに、ふつうの読者は思わず首をかしげてしまう。」（321-2頁）

「奇妙なことにラッセルは、人びとが何を思い何を望んでいるかについて理屈の上では わかっていても、実際的な知識はまるで持っていないというこの危険な二面性を、他人の中にはめざとく見いだしそれを嘆いてみせる能力を持っていた。1920年、ソ連を訪れレーニンと会見して、『レーニンが理論の化身である』ことに気づく。『彼は人民を軽蔑する特権階級的知識人だという印象を受けた』と書いている。この二面性を持つ人間は賢明に統治する適性がないことをラッセルはよく知っていた。・・・このレーニン評がかなり自分自身に当てはまっているとは考えられなかっただろうし、考えてみようともしなかっただろう。彼もまた知的貴族のひとり、人民を軽蔑し、時にはあわれみもした。」（322頁）

「さらに、ラッセルは人びとが実際にどう行動するかを知らなかっただけではない。自己認識もまったく欠落していた。自分自身の特徴がレーニンに重なることがわかっていない。さらに重大なのは、一般の人びとが非理と感情の力に流されていると嘆く当の自分がそうであることを、まったく意識していないのである。世間の諸悪は、理論、理性、節度によって大方解決できるというのがラッセルの一貫した態度だった。男も女も感情に走らず理性に従い、直感に頼らず論理をもって語り、極端に偏らず節度を保つなら、戦争など起こるはずもなく、人間関係は円満になり、人類を取り巻く状況は着実に改善されるだろう、と。純粋数学には論理で定義できない概念はなく、論証によって解決できない問題はないというのが数学者としてのラッセルの考え方である。さすがに彼も人間性にかかわる問題が方程式のように解決できると思うほど愚かではなかったが、それでも、時間、忍耐、方法、節度をもって取り組めば、人間の公私にわたるどんな困難な問題も論証が答えを出してくれると信じていた。哲学的に冷静に対処することは可能だと確信していた。とりわけ、論証と論理の枠組みが正しければ、大多数の人間はきちんとした行動ができると考えていた。」（322-3頁）

こうした意識や態度は、ラッセルだけでなく、多くの人に見られる、いわゆる価値意識と価値志向の乖離の問題である。例えば、日本の場合、政治について民主主義を主張していても、現実には、権威主義的に行動する政治家や官僚、諸団体の幹部によく見られる現象である。無論、これは、労働組合や大学などの諸集団に普遍的に見られるものである。しかも、これは、古く古代ギリシアのソクラテスやプラトンの時代以来の難問の一つである。このために、人類は、多数の戦争を起こし、幾多の市民の生命や健全な生活を奪ってきたし、この論文を書いているただ今でも人々に苦難を強いている現実的な問題である。

4．ジャン＝ポール・サルトル　毛皮とインクの小さなボール

「ジャン＝ポール・サルトルは、バートランド・ラッセル同様、一般大衆に説教しようとした

職業的哲学者だった。けれども、ふたりのやり方には、重要な違いがある。ラッセルは哲学を、大衆には参加できない真正な学問と考え、自分のような大衆的哲学者にできるのは、せいぜい知恵のかけらを抜粋し、新聞記事や大衆向けの本や放送といった、相当薄めた形で広めることだと思っていた。それにひきかえ、哲学が中学で教えられ、カフェで論じられる国で活躍したサルトルは、戯曲や小説による自分流のやり方で、大衆の参加を実現できると信じていた。･･･たしかに、今世紀の哲学者でこれほど多くの人びと、特に世界中の若者の精神や態度にこれだけじかに衝撃を与えた哲学者はいない。1940年代後半から1950年代にかけて、実存主義は人気のある哲学だった。」（357-60頁）

「有名な知識人の多くと同じく、サルトルも極めつけのエゴイストである。子ども時代の状況を聞けば、それも驚くにはあたらない。甘やかされたひとりっ子の典型で、家庭は地方の中流階級の上、父は海軍士官、母はアルザス出身の裕福なスイス人だった。・・・サルトルは真実をそれほど尊重しなかったから、子ども時代や青春時代についての話がどれほど信用のおけるものかわからない。・・・サルトルはその世代としてはほぼ最高の教育を受けた。ラロシェルの優秀なリセ、次いで、当時のフランスでたぶん最高の高校だったパリのアンリ・カトル・リセ（アンリ4世高等中学）に寮生として2年、そしてフランスの主だった学者が学位を取るエコル・ノルマル・シューペリュール（高等師範学校）にはいっている。･･･サルトルは一度目の学位試験に落第し、翌年トップの成績で受かる。3年後輩のボーボワールは2位だった。時は1929年6月、当時の優秀な若者の常として、サルトルは教師になった。」（359-60頁）その後10年間教師を続けるが、一時、フッサールやハイデッガーや当時中央ヨーロッパで最新の哲学だった現象学を研究したこともあった（357-60頁）。

「サルトルはブルジョアをにくんだ。実のところ階級意識が非常に強かったが、マルクス主義者ではない。はっきりいうと、たぶん、抜粋を別として、マルクスを読んだことがないのである。反逆児だったのはたしかだが、理由のない反逆児だった。政党にも加盟していない。ヒトラーの台頭にも興味を示さなかったし、スペイン（内乱）にも心を動かされない。後で何と言っていようと、記録を見る限り、サルトルは戦前には、はっきりした政治的意見をまったく持っていなかった。」（360頁）

「サルトルを形作ったのは戦争である。フランスにとって、戦争は災難だった。・・・戦争は死をもたらした。他の人びとには危険と恥辱。しかし、サルトルにはいい戦争だった。徴集されて、陸軍砲兵隊本部の気象班に配属されたが、熱気球を上げて風向きを調べるのがその仕事である。戦友はサルトルを笑いものにした。数学の教授だった伍長は、『最初から軍隊的な意味では役に立たないのがわかった』と書いている。・・・サルトルが占領軍に積極的に協力したことはない。いちばんそれに近かったのは、占領軍に協力的な週刊誌『コメディア』に執筆したことで、一時はコラムの連載を承諾している。しかし自分の作品を出版したり、戯曲を上演するのになんの苦労もいらなかった。・・・漠然と、サルトルはレジスタンスに貢献したいと願っていた。幸いな

ことに、その努力は実を結ばない。ここに奇妙な皮肉がある。知識人について書いていると慣れっこになってしまうたぐいの皮肉である。ほどなく実存主義とよばれるようになるサルトルの哲学は、すでに頭の中に形作られ始めていた。要約すれば行動の哲学で、人の性格や存在意義は見解ではなく行動によって、ことばではなく行ないによって決定される、とする。ナチスによる占領はサルトルの反権威主義本能をいたく刺激した。彼はそれと戦いたかった。自分の哲学的規範に従うなら、兵員輸送列車を爆破するとか、親衛隊員を狙撃するとかして戦ったはずである。しかし、実際は、そうはしなかった。語り、そして書くだけだ。理屈では、つまり頭と心情はレジスタンスびいきだったが、事実はちがう。彼は『社会主義と自由』という会合を開いて討論する地下グループの結成に力を貸した。・・・サルトルは、強いてどれかと言えば、プルードンに従った。・・・レジスタンスの活動家だったラウール・レヴィは、彼らの仕事を『茶飲み話』、サルトルその人を『政治オンチ』と呼んでいる。・・・つまり、サルトルはレジスタンスのためには大したことを何もやっていないということである。ユダヤ人の救済にも、指一本あげもしなければ、一言書きもしない。ひたすら自分の成功に邁進する。勢力的に、戯曲、哲学、小説を、もっぱらカフェで書きまくった。」（362-4頁）「今やサルトルは、以前の有名知識人の多くと同様、自分を売り込む術の達人となっていた。自分でやらないことは信奉者たちがやってくれる。・・・実存主義は単に読むだけの哲学ではなく、楽しめる流行でもあった。ある『実存主義要理』は、『実存主義は信仰と同じで説明不可能だ。実行するしかない』と主張し、読者に実行する場所を教えている。」（369頁）

ところで、サルトルも、女性にはだらしなく、彼女らに支配的な態度をとり続けた。ボーボワールの場合、「どう見ても、サルトルは彼女をルソーがテレーズを扱った以上に良くはあしらわなかった。名うての不実な男だっただけよけい悪かった。文学史上これほど女性を食い物にした男はまずいないだろう。・・・サルトルは1960年代にメール・ショーヴィニスト（男性優越主義者）と呼ばれるようになったものの典型である。幼年時代にちやほやしてくれる女性たちの中心に自分がすわっていた『天国』を、成人後に再構築することを目標とし、女性を考えるときには勝利と占有しか頭にない・・・。」（371-8頁）

「こうして、ときには手を焼きながらも、自分を崇拝する女性たちに囲まれていたサルトルには、男性を相手にしている暇がなかった。いつも男性の秘書を置いていて、ジャン・コーのように優秀な者も何人かいる。また、いつも若い男性の知識人に囲まれてはいる。しかし、みな給料や寄付や支援を彼に仰いでいる人たちだった。サルトルが長くは辛抱できなかったのは対等な男性の知識人、自分と同年代または年上の人間である。そういう人は彼のいい加減で口先だけの議論をいつぺしゃんこにするかわからないからだった。」（378頁）

「サルトルの政治的見解が不安定で矛盾し、時としてまったく軽薄だったのは、自分と同程度の知識人と友情を結べなかったことが原因だともいえる。ほんとうのところ、彼は生まれつき『政治的動物』ではなかった。40歳になるまでこれといった見解を持たず、ケストラーやアロンといった、1940年代の終わりには政治的にヘビー級になっていた人たちと決裂してからは、支持

するものは誰だろうと何だろうとよかったのだ。・・・どうやら、知識人は『労働者』を後援する道徳的義務があると信じたらしい。ところで困ったことに、サルトルは労働者を知らず、会う努力もしなかった。・・・サルトルの唯一積極的な活動は、1948年2月に、革命的民主連合という、非共産党左翼による冷戦反対運動の組織化を手伝ったことである。この組織は世界の知識人――サルトルのいわゆる『国際的な頭脳』――を結集することを目標とし、大陸の団結がテーマだった。『ヨーロッパの若者よ、団結せよ！』と、サルトルは1948年6月の演説でぶちあげた。『自分の運命を作り上げるのだ！・・・ヨーロッパを作り出すことによって、この新しい世代は民主主義を作り上げるのだ。』・・・ルーセによれば、彼は『観念のゲームと動きに熱中して』いるが、現実の物事にはほとんど関心がない。・・・革命的民主連合はあっけなく解散し、サルトルはよく変わる関心をゲイリー・デーヴィスのばかげた世界市民運動に向ける。」（380-1頁）

サルトルは、共産主義者達が起こした行為に対し、不当な行動を行う政府に対する抗議行動には参加せず、「サルトルは、議会民主主義に一熱意はおろか――興味も、ほんとうの知識も示していない。多数政党の社会で投票権を持つこと――彼の言う自由は全然そういうものではなかった。ではサルトルの言う自由とは何なのか。それに答えるのはずっとむずかしい。」(382頁) 彼は、4年間共産党の路線を一貫して支持し、ソ連を礼賛したが、何年も後に、彼はこれが嘘だった事を認めている（383-4頁）。

1960年代の大半をサルトルは、中国や第三世界への旅行に費やし、キューバのカストロ（「直接民主主義の実現者」、と彼は見ている。筆者）やユーゴスラヴィアのチトー、毛沢東の中国を褒めあげ、ヴェトナムに対するアメリカの「戦争犯罪」をナチスにたとえ、第三世界の崇拝者には、白人の被抑圧体制を暴力によって打倒する事を勧め、彼は、アフリカ大陸やカンボジアで起きた、内戦と殺戮に大いに貢献している（385-7頁）。

「1970年の春、フランスでの極左によって、毛沢東の暴力的な文化革命をヨーロッパで実現しようとする時代遅れの試みが行なわれた。この運動は、プロレタリア左翼と呼ばれ、サルトルは加わることに同意する。たてまえ上、運動の機関誌『人民の主張』の編集長になったが、それは主に警察による差し押さえを予防するためだった。この運動の目標は、サルトルの好みから見て暴力的なものだった――工場の管理者は投獄し、国会の議員はリンチするよう呼びかけている――が、素朴にロマンチックで、子どもっぽく、知識人に非常な反感を持っていた。」（388-9頁）

「サルトルはことばが自分の全生涯だと打ち明けている。・・・サルトルに言わせれば、『[書くこと] は私の習慣であり、同時に仕事でもある。』サルトルは自分が書いたものの有効性については悲観的だった。『長年私はペンを剣と考えてきた。今になってわれわれがいかに無力であるか実感している。だがそれはどうでもいい。私は今もこれからも本を書きつづける。彼は話しもした。時によると際限なく話し続けた。誰も聞いてないときに話すこともあった。」（390-1頁）

また、「多くの知識人特に有名な人物とちがって、サルトルは金についてはほんとうに鷹揚だった。カフェやレストランでは、ほとんど知らない人たちの分まで勘定をはらってやるのが楽しみ

だった。」（392頁）運動にも寄付をした。革命的民主連合には30万フラン（1948年の為替相場で約10万ドル）以上も与えている。・・・気前の良さと、（たまに見せる）ふざけた感じが、サルトルの性格のいちばんいい面だろう。しかし、彼の金に対する態度は無責任でもあった。印税やエージェントの手数料についてはプロのふりをした・・・1950年代の終わりには深刻な経済上のトラブルにおちこんで、とうとうそこから脱出できなかった。・・・1970年代には、哀れな人物になっていく。老け込み、ほとんど目は見えず、酔っていることが多く、金の心配を抱え、自分の意見ははっきりしない。・・・私生活は相変わらず女性関係が花盛りで、時間はハレムで配分された。・・・1965年に彼はこっそり愛人のアルレットを養女にしていた。そのため、彼女が著作権を含めたすべてを相続し、遺稿の出版権を握った。ボーボワールにとって、それは最後の裏切りだった。」（392--4頁）

ジョンソンによれば、「実際、サルトルはラッセル同様、公共政策についての考え方にいかなる統一性も一貫性も獲得できなかった。彼の死後、実体のある教義は残っていない。結局のところ、またしてもラッセルのように、彼は左翼と若者の陣営に属していたいという漠然とした望みのために戦っただけなのだ。混乱していたとはいえ、一時はたしかに斬新な人生哲学そのものに思えたサルトルの知的衰えは、ひときわ見物だった。しかし、教養のある大衆のかなりの部分は、いつの世にも、いかに不十分だろうと、知的指導者を求めるものである。重大な誤りを犯しながらも、ルソーはその死に際して、そして死後も、広く名誉を与えられた。今ひとりの『大物』サルトルも、パリの知識人たちによって荘厳な葬式をあげてもらった。大部分が若者の、5万人を超す人びとがモンパルナス墓地へ向かう遺体につき添った。・・・彼らはいったいどの主義に栄誉を与えようと集まったのか、大挙参列することによってどんな信仰、人類のすばらしい真実を擁護しようとしていたのか、それを問う価値は十分あるだろう。」（394-5頁）

このように、これまでに見てきたいわゆる知識人同様、サルトルは、体系的な独自の哲学を樹立できず、しかも、思想が行動にほとんど結びつかず、私生活においても、無節操だったったにも拘わらず、有名だった。以上の4人が本当に知識人であったかについ明らかにするためには、更なる深い研究が求められる。

Ⅲ　エドワード・W・サイードの現代知識人論

サイードは、その著書『知識人とは何か』（原書名：*Representation of the Intellectual : The 1993 Reith Lectures*）の第1章　「知識人の表象」の中で、次の7人を知識人として取り上げている。第1に、アントニオ・グラムシである。グラムシは、『獄中ノート』の中で「してみると、あらゆる人間は知識人であるといえそうだ。ただし、あらゆる人間が社会のなかで知識人の機能を担っているわけではないにしても」[(9)]、と述べている。

「グラムシの立論によれば、社会の中で知識人の機能をはたす人間は、おおむねふたつのタイ

プに分けられる。ひとつは、教師や聖職者や行政管理者といった伝統的知識人。こうした人びとは、何世代にもわたって、同じ仕事をひきついでいる。いまひとつは、有機的知識人。グラムシによれば有機的知識人は、知識人を利用して利害を組織化し、権力を手に入れ、支配権の拡張をはかる階級なり運動とむすびつく。」(24頁) サイードによれば、「現在、広告代理店や宣伝担当のエキスパートたちは、洗剤会社なり航空会社なりが市場をよりおおく確保できるよう、さまざまなテクニックをひねりだしているところであり、さしずめ彼らこそ、グラムシの定義による有機的知識人といえるだろう。」(24頁)

第2に、「これと対極をなすのが、ジュリアン・バンダの有名な知識人論である。バンダの定義によると、知識人は、たぐいまれな才能にめぐまれ、道徳的にも卓越し、人類の良心ともいうべき哲人王たちであり、彼らは小規模の集団を形成する。」(25頁) 彼は、「たとえばソクラテスとイエスが、スピノザやヴォルテールやエルネスト・ルナンといった近代の知識人とならんでたえず言及される。真の知識人は聖職者集団を構成する。」(25頁) サイードによれば、「こうした知識人と、地位ならびに機能の両面で一線を画するもの・・・は、俗人集団である。彼らは、物質的な利益とか個人の栄達に関心をよせるだけでなく、機をみるに敏で、世俗の権力におもねる凡庸な人間たちである。これに対し真の知識人は、バンダがいうように、『その活動が、現実的な目的追求だけに終わったりする人びとではなく、むしろ芸術や科学、あるいは形而上的な思索に喜びを見いだそうとする人びと、端的にいうと、非物質的な富の所有を求め、したがって、『わが王国は、この世にあらじ』となんらかのかたちでいってのけられる人びと』のことである。」(25-6頁)

また、バンダは、「真の知識人は、実用的な関心から身をひくという点で、他の人間とは異なる象徴的人格をおびている。知識人は、そのようなものである以上、人数はかぎられ、日々、大量に世に送りだされることもない。知識人は、どこまでも、強烈な個性をそなえた個人でなければならず、またとりわけ、現状に対してほとんどいつも異議申し立てをしていなければならない。」(28頁)、と主張している。それゆえ、「バンダのいう知識人は、他とは区別される少人数とならざるをえない——ちなみにバンダはこの集団に女性を加えてはいない。彼ら知識人の集団は、その地をもゆるがす声音でもって、歯に衣を着せぬ呪詛を、高みから人類に投げつける。・・・このような問題はあるにせよ、バンダによって素描された現実の知識人のイメージが、魅力的で首肯せざるをえないものであることについて、わたしのみるところ、すくなくとも疑問の余地はないように思われる。」(28頁)、とサイードは、判断している。更に、バンダは、「ナチスに協力した知識人を、共産主義に無批判なままかぶれた知識人と同罪だと弾劾する。ここからは、バンダの著作の本質的に保守的な面がみてとれる。だが、その攻撃的なレトリックの奥底には、俗世に染まらぬ生きかたをすることで、権力に対して真実を語ることのできる人間という硬骨の知識人像がみいだせる。妥協をこばみ、能弁で、怖いもの知らずの、怒れる個人としての知識人。この知識人をまえにしては、いかに強大で威圧的な世俗権力といえども、批判と辛辣な非難をまぬ

がれえないのである。」（29頁）

「グラムシは知識人のことを、社会において特定の機能をはたす人間というように社会的に分析したのだが、こちらの知識人像のほうは、バンダのしめしたそれよりも、現実の姿にかなり近い。･･･今日、知識の生産あるいは分配のいずれかにかかわる分野で仕事をしている者は誰であれ、グラムシのいう意味での知識人である。」（30頁）、とサイードは考えている。

第3に、アメリカの社会学者、アルヴィン・グールドナーである。彼によれば、「知識人がいまや新しい階級を形成するにいたった。そして、いまや知識人である管理者たちが、かつて資本家や地主階級がつとめていた役割を、かなりの部分で、肩代わりするようになった、と。けれどもグールドナーは、こうも述べていた。知識人は、その社会的地位の向上とひきかえにかつてのように幅広い階層の聴衆に向けて語りかける人間であることをやめてしまう、と。そのかわり彼らは、グールドナーが批判的言説の文化と呼ぶものに所属するようになる。」（30-1頁）

第4に、「同じようなことを、フランスの哲学者ミシェル・フーコーも主張していた。フーコーによれば、いわゆる知識人（彼はおそらくジャン＝ポール・サルトルのことを念頭においている）がはたしていた役割を、いまでは『特定的な』知識人が肩代わりするようになった。『特定的な』知識人というのは、なんらかの学問分野で仕事をしているが、その専門技能を、ほかのいろいろな分野で生かせる人間のことだ。フーコーがここでとくに考えているのは、アメリカの物理学者ロバート・オッペンハイマーである。オッペンハイマーは、・・・アメリカ合衆国の科学問題に関して代表委員のようなかたちで活動した。」（31頁）

サイードによれば、「知識人なくして近代史における主要な革命は存在しなかった。だが逆に、知識人なくして主要な反革命運動も存在しなかった。知識人は、こうした運動の父であり、母であり、もちろん息子であり娘であり、さらには甥であり姪であった。」（32頁）また、「わたしが主張したいのは、知識人とはあくまでも社会のなかで特殊な公的役割を担う個人であって、知識人は顔のない専門家に還元できない、つまり特定の職務をこなす有資格者階層に還元することはできない。わたしにとってなによりも重要な事実は、知識人が、公衆に向けて、あるいは公衆になりかわって、メッセージなり、思想なり、姿勢なり、哲学なり、意見なりを表象（レプリゼント）＝代弁したり、肉付けしたり、明晰に言語化できる能力にめぐまれた個人であるということだ。・・・知識人は、こうしたことを普遍性の原則にのっとっておこなう。ここでいう普遍性の原則とは、以下のことをいう。あらゆる人間は、自由や公正に関して世俗権力や国家から適正なふるまいを要求できる権利をもつこと。そして意図的であれ、不注意であれ、こうしたふるまいの規準が無視されるならば、そのような侵犯行為には断固抗議し、勇気をもって闘わねばならないということである。」（33頁）

サイードは、続ける。「結局のところ、重要なのは、代表的（レプリゼンタティヴ）（＝代弁する）人物としての知識人のありかたである――つまり、知識人たる者、なんらかの立場をはっきりと代表（レプリゼント）＝表象する人間、また、あらゆる障害をものともせず、聴衆に対して明確な言語表象をかたちづくる人間たる

べきなのだ。わたしの論旨とは、知識人が表象＝代弁する技能を使命としておびた個人であるということにつきる。この使命は、どのようなかたちで実現されてもよい。・・・この使命が重要なのは、それが公的に認知されたものであり、それには責務とリスクがともない、また大胆さと繊細さも必要となるからである。たしかにジャン＝ポール・サルトルやバートランド・ラッセルの書いたものを読むとき強く迫まってくるのは、その論じかたではなく、彼ら特有の個人的な声であり、その存在感であるが、これは、彼らが自己の信ずるところを臆せず語っているからである。彼らが、顔のない役人やことなかれ主義の官僚によもやまちがわれることはあるまい。」（35 頁）

ここに、ジョンソンとサイードのラッセルとサルトルの見方に違いが認められる。しかし、サイードは、「複雑な個人的事情は、知識人サルトルの力を弱めたり、知識人としての資格を奪うどころか、彼が語ったことに、なまなましさと緊迫感をあたえ、彼とても人間的あやまちとは無縁ではなかったこと、彼が無味乾燥な道徳的題目ばかりをならべるような説教者とはちがっていたことをおしえてくれるのである。・・・知識人が、潜在的もしくは大規模な社会運動の代弁者というにとどまらず、まさに知識人ならではといえるような、周囲と摩擦をおこしそうな一風変わったライフ・スタイルの代表者でもあるということだ。」（37 頁）として、評価しているのである。

第 5 に、「そうした知識人の役割がはじめて記述された場所を探すのに、19 世紀や 20 世紀初頭の特異な小説ほど適した場所はないだろう。たとえば、ツルゲーネフの『父と子』、フロベールの『感情教育』、ジョイスの『若き日の芸術家の肖像』――こうした小説のなかでは、社会的現実の表象を大きくゆさぶり、それを決定的とさえいえるくらいに変えてしまうような、新たな役者が舞台に突如登場する。近代の若き知識人たちである。」（37 頁）例えば、「バザーロフの友人であるキルサーノフ家の人びとや、善良で哀れをさそう彼の両親夫婦ですら、社会と折り合いながら暮らしているのに対し、知識人としてのバザーロフの傲慢で挑発的な姿勢は、彼を物語の外に追いやってしまう。彼は物語世界になじまないばかりか、いかなる家庭のなかにも組みこまれないのである。」（39-40 頁）

第 6 に、「これがもっとはっきりするのは、ジョイスが描くところの若きヒーロー、スティーヴン・ディーグラス［『若き日の芸術家の肖像』の主人公］の場合である。彼は青春時代、さまざまなものに翻弄される。・・・ゆっくりと成長する知識人としての自己のありように対する確固たる自覚。ちなみにそのモットーは、ルシファーのように〈われ仕えず（ノン・セルウィアム）〉であった。・・・この小説が終わる頃までに、主人公は、家族やフェニアン団員に対して批判的で距離をとるだけでなく、自分の個性や、そのしばしば物議をかもす人格を枠にはめようとするイデオロギー的計略に対しても、批判的な距離をとるようになる［フェニアン団は、1858 年アイルランドとアメリカでアイルランド共和国の建設をめざしてつくられた秘密結社］・・・この小説のなかでもっとも有名な演説のなかで、スティーヴンは、ひとことでいえば、知識人のいだく自由の信念といったものを高らかに表明する。・・・ぼくがやってみたいのは、人生とか芸術をとおして、自分自身を、できるかぎり自由に、できるかぎりそこなうことなく表現することなんだ。そのため、自

分をまもるのに使う武器は、三つにかぎることにする－沈黙、亡命、そして狡知」。(40-2頁)

「彼の信条のなかで、もっとも強烈なのは、知的自由をまもりぬこうとする姿勢だろう。知的自由、これこそ、知識人の行動における重要課題である。頑迷固陋な硬骨漢、あるいは徹底した毒舌家というだけでは、目標として不十分である。知識人の活動の目的は、人間の自由と知識をひろげることである。・・・彼らが正しくみぬいていないのは、ポストモダン時代にあっても、知識人が活躍できるチャンスは数かぎりなくあるという事実である。たとえば、各国政府はいまもなお国民をこれみよがしに抑圧しているし、重大な司法のあやまりはいまも起こっているし、権力による知識人の体制化や体制内とりこみによって、知識人の声は効果的に圧し殺されている。知識人がその使命を忘れ逸脱する状況は、いまもなおしばしば大きな問題なのである。」(42-3頁)

第7として最後に、フロベールの描く知識人は、例えばバザーロフである。フロベールによれば、「知識人の使命は、ハウツーものの手引きから学べるような固定されたものではなく、むしろ現代の生活そのものと対決しながら選びとられる具体的な経験として描かれている。知識人の表象行為、つまり知識人である彼ないし彼女が、目的なり理念なりを社会に向けて明晰に分節化する行為は、ただエゴを満たしたり、地位を高めたりするためだけのものではない。いわんやそれは、権力をもつ官僚組織や気前のよい雇用者におもねるものでもない。知識人の表象とは、懐疑的な意識に根ざし、たえず合理的な探求と道徳的判断へと向かう活動そのものである。またそうであるがゆえに、知識人たらんとする個人は、人びとの記憶に刻まれたり、危険な目にあったりするわけである。言葉をいかに効果的に使うかを学ぶこと、言葉を使って介入すべき頃あいを知っていること。これが、知識人の行動のふたつのとりわけ重要な特徴である。」(45頁)

それにしても、知識人は、今日、何を表象(レプリゼント)＝代弁するのか。サイードによれば、「アメリカの社会学者で、強烈な社会的ヴィジョンをもち、なおかつ自分の考えを単刀直入に力強い文章で伝えるという非凡な才能にめぐまれていた奔放不羈の知識人、C・ライト・ミルズである。」(46頁)彼は、危機的な状況を次のように述べている。「自立した芸術家や知識人が属するのは少数の稀有の個人からなる集団だが、この集団は、真正の生きた過程がステレオタイプ化し、その結果死にいたることに対しあくまでも抵抗し闘う用意ができている。現代のコミュニケーション［いいかえれば現代の表象システム］がわたしたちに押しつけるステレオタイプ化したヴィジョンなり思考の仮面をはぎとり、それを粉砕する能力は、いまや、新鮮な認識ができるか否かにかかっている。大衆芸術の世界や大衆思考の世界では、ますます政治的要求に凍結されるようになった。だからこそ政治の世界では、知識人の連帯と努力が優先されなければならない。もし思想家が政治闘争のなかで真実の価値を身をもって体現しないのなら、そのような思想家は、生きた経験全体を責任を持って処理することはできないのである。」(46-7頁)

サイードによれば、アメリカによる最近のイラクに対する湾岸戦争の際、ヴェトナム侵攻やパナマ侵攻は、「忘れられたことを発掘し、否定されたものにつながりをつけ、戦争とそれに付随する殺戮という目標を回避できたであろうべつの選択肢をしめすことこそ、当時、知識人がはた

すべき責務であったのだ。」（48 頁）

「C・ライト・ミルズの議論の中心には、大衆と個人の対立がある。政府から企業にいたる大組織のもつ強大な権力と、個人のみならず、従属的位置にあると見なされる人たち――マイノリティ集団、小規模集団、小国家、劣等もしくは弱小な文化や人種とみなされるものに属している人たち――が耐えている相対的に弱い立場とのあいだには、内的な不均衡が存在している。こうした状況のなかで知識人が弱い者、表象＝代弁（レプリゼント）されない者たちと同じ側にたつことは、わたしにとっては疑問の余地のないことである。」（48-9 頁）、とサイードは見ている。

彼によれば、「知識人の使命とは、つねに努力すること、それも、どこまでいってもきりのない、またいつまでも不完全なものとならざるをえない努力をつづけるということだ。けれども、知識人の使命のこうした奮闘と複雑さは、たとえ、使命をまっとうしたからといって、とりわけ人から好かれる人物になることはないにしても、すくなくともわたしにとっては、知識人の使命をいっそう豊かなものにしてくれる要因なのである。」（49-50 頁）

それでは、サイード自身は、知識人をどのように考えていたのであろうか。彼は、依頼されたリース講演の中で、「知識人の公的役割を、アウトサイダーであり、『アマチュア』であり、現状の攪乱者である」（4-5 頁）、と語り、「わたしが自分で書いた本のなかで覆えそうと闘ってきた相手は、『東洋（イースト）』とか『西洋（ウエスト）』といった虚構（フィクション）であり、またさらに、人種差別主義が捏造したところの従属人種、東洋人、アーリア人、ネグロといった本質主義的分類法であった。と同時に、いっぽうで、過去において植民地主義の暴虐を幾度もかいくぐってきた国々では、原初にあった無垢の状態が西欧人によっておかされたという被害者意識が強いが、わたしは、こうした考えかたに与（くみ）することなく、つぎの点をくりかえし強調してきた。東洋とか西洋といった神話的抽象概念は端的にいって虚偽であるが、同じことは、かつての植民地国が西欧に向けて発する非難のレトリックのなかで駆使されるむきだしの対立図式についてもいえる。」（７頁）(10)

この「講演のなかで試みたのは、知識人について、右翼か左翼かをとりざたすることではなく、その公的活動が予測できない意外性にとみ、その発言がなんらかのスローガンや党の綱領や硬直化したドグマにとりこまれたりしない 、そんな人間として知識人を描くことであった。わたしが示唆しようとしたのは、知識人個人にとって、人間の悲惨と抑圧に関する真実を語ることが、所属する政党とか、民族的背景とか、国家への素朴な忠誠心などよりも優先されるべきだということである。・・・わたしの知識人論のなかで、ひとつの重要な役割を演じているのが、普遍的（ユニバーサル）で単一の規準にどこまでも固執する知識人の姿勢である。」（８頁）、と彼は主張している。また、「普遍性の意識とは、リスクを背負うことを意味する。わたしたちの文化的背景、わたしたちの用いる言語、わたしたちの国籍は、他者の現実から、わたしたちを保護してくれるだけに、ぬるま湯的な安心感にひたらせてくれるのだが、そのようなぬるま湯から脱するには、普遍性に依拠するというリスクを背負わなければならない。人間の行動を考える際、単一の規準となるものを模索し、それにあくまでも固執するということである。」（9-10 頁）、と述べ、「あらゆる知識人

は、自分の聴衆に向けて、なにかを表象（レプリゼント）し、そうすることで、自分自身を表象（レプリゼント）することになるだろうという考えかた。あなたが大学の人間であろうと、ボヘミアン的随筆家であろうと、はたまた国防省のコンサルタントであろうと、あなたがおこなうことすべての背後には、あなたが、自分自身について自分はこういうことをなすという一定の理念なり表象なりが存在しているはずである・・・現代の世俗権力は、知識人を、かつてないほどまるめこんでしまった。・・・このような国家への忠誠の圧力、そこからどうしたら相対的に自律できるかを模索すること、これこそ、私見によれば、知識人の主たる責務である。この責務を念頭において、わたし独自の知識人観がうまれた――知識人とは亡命者にして周辺的存在であり、またアマチュアであり、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である。」（11-2頁）、と断言している。

更に、「わたしをとらえて離さないのは、同化精神よりは、やはりなんといっても反骨精神であって、知識人のありようをめぐるロマンスなり、利害なり、挑戦なりは、すべて、現状に対する異議申し立て行為のなかで光をはなつものなのだ――とりわけ、表象されざる恵まれざる集団のための闘いが、苦しく不利な状況にある時代であればなおさら。こうした意識をさらに強めてくれたのが、パレスチナの政治にかかわるというわたしの体験であった。いま西欧においてもアラブ世界においても、持てる者と持たざる者との摩擦と軋轢（あつれき）は、日々ふかまるばかりなのだが、そんななか政府関係の仕事をする知識人のあいだに、おつにすました、われ関せずの、まさに唖然とする姿勢が蔓延しているのだ。」（14頁）

その上、サイードは、知識人である事の困難さを次のように述べている。すなわち、「誤解のないようつけ加えたい。知識人のことを、ユーモアを解さない不平家であると考えてもらってはこまる。むしろその反対である・・・そもそも、権力とは縁のない状態のままで、嘆かわしい事象の一部始終をつぶさにみてとる現場証人となることは、けっして単調で退屈なことではないだろう。・・・オールターナティヴな可能性を垣間みせる材（財？筆者）源を徹底して探しまわり、埋もれた記録を発掘し、忘れられた（あるいは廃棄された）歴史を復活させねばならない。また、このようないとなみを成功させるには、劇的なもの、反抗的なものに敏感に反応するような感性を養い、ただでさえすくない発言の機会を最大限利用し、聴衆の注意を一身にひきつけ、機知とユーモア、それに論争術で敵対者を凌駕するよう心がけねばならない。まもるべき砦となる職務もなく、また、まもりを固めて防御すべき縄張りもない知識人には、つねに、不安定で遊牧民的なところがある。それゆえ知識人には、虚飾と尊大な身振りよりも、自己に対する冷笑こそ似つかわしく、言葉を濁すことよりも、ずけずけものをいうことのほうが似つかわしい。・・・これは孤独な、むくわれない生きざまといえば、まさにそのとおりである。けれどもこれは、長いものには巻かれろ式に現状の悲惨を黙認することにくらべたら、いつも、はるかにまともな生きかたなのである。」（15-6頁）

最後に、サイードは、知識人の役割を次のように結論づけていろ。すなわち、「知識人は、現在支配的な規範に対抗するか、さもなくば支配的な規範に同調するかたちで、『公的生活に秩序

と継続性』をあたえるのである。わたしの意見をいわせてもらえば、このふたつの可能性のうち、最初の可能性（つまり支配的な規範を論駁すること）だけが、現代の知識人のほんとうの役割であると思う。」（66-7頁）、と。これには、筆者も賛同する。

Ⅳ　森　有正の現代知識人論

森　有正は、「知識人とは何か」という、聞き手が　矢口圭振であるインタヴュー（1974・6月「流動」）の中で、「知識人とは何か」、また、その「役割」について問われて、次のように語っている。「私自身は、『知識人』という言葉はあまり好きではありませんが、一般的に言って、一応の知識を持ち、社会の時事的なさまざまな問題について発言する人という意味で使われているのではないでしょうか。日本では、大学の先生はみな知識人とみられているわけですね。しかし、私の考えでは、仮に『知識人』という言葉を使うとすれば、社会に何か事が起こった時に、自己の知識・思惟に裏付けられた自分の考えを、発言する人のことであろう、と思います。ですから、知識人は、社会のために発言するという明確な意識・態度を持たなければならないと思うんです。決して、売名や商売でする人であってはならないわけです。昔、日本には『警世家』という言葉がありましたですね。いわば知識人とは、そのような人のことを指すのではないでしょうか。5年か10年に一度、必要な時に本当に言いたいことを社会に向かって発言する。肝心な時だけに皆の参考になることを言って、あとは沈黙するか、実際に行動するなり、本来の仕事を続ける。しかし、日本の人はすぐにジャーナリズムと関係を持ちたがりますね。ジャーナリズムにのべつ発言し、ジャーナリズムに養われているような人は知識人の資格もなければ、知識人でも何でもありません。むしろジャーナリストでしょうね。フランスでは、そのような人は知識人失格であるとしてすぐにスポイルされてしまうでしょう。その意味でも、日本のような形の、知識人に甘いジャーナリズムは、おそらく世界中どこにもないでしょうね・・・日本では、特定のジャーナリズムに雇われているような形になっていますね。ですから、社会を批判するはずの人が既に社会の一部に取り込まれてしまっていますから、とても根本的な批判はできないわけです。」(11)

また、森は、日本の知識人の問題点を指摘している。すなわち、「日本では大学以上の学校の先生は全部インテリでしょう。しかも、その人が何を考え何を言うかということが関心の中心になって発言の価値が決まってくるのではなくて、どの大学なり会社なり、新聞屋、本屋に雇われているかによって判断が決まってくるわけですからね。しかもそれはまだいい方の部類でして、どこにも専属できない人がウジャウジャいて、至るところでどこかいい口がないか、いいところで書かせてくれないだろうかと、必死であちらこちら探しているわけです。また各新聞雑誌はその中から、将来有望な人を探しだそうとしますしね。ですから日本のジャーナリズム全体が、大きな雇用関係の市場、労働力市場みたいになって、各人はそこで有利な地位を占めようとして一所懸命書いているわけです。だから、社会を改革しようとか、良くしようということは、みんな

二の次、三の次ということになってきます。」（83-4頁）、と。

更に、森は、「たとえば、『ベ平連』など・・・の運動や発言は直接日本に関係がありますけれど、それにしても、日本にはほとんど何の影響もないですよ」（85頁）、と批判した上で、真の知識人の例として、次の二人の人物を挙げている。すなわち、「戦争中に美濃部達吉さんが当時の憲法を守って、『天皇機関説』を敢然と持ち通した。あれが本当の知識人の運動ですよ。その以前にも民本主義思想『黎明会』をつくった吉野作造さんがやって問題になった『森戸事件』の弁護などが、本当の知識人の動きなのであって・・・。」（85頁）、その上、彼は、明治時代の第一級の知識人として、夏目漱石や森　鴎外を挙げている（91頁）。

次に、知識人と民衆との連帯について尋ねられた森は、これを消極的に考えている。彼によれば、「私は民衆と連帯なんかできないと思いますよ。民衆とは、それ自体の運動法則で動いている集団ですからね。私たちももちろん民衆の一部ではあるけれども、私たちは民衆の中で発言したりしなくはないけれども、しかし今、民衆とコンタクトを取ってやるといっても、大変難しいことです。差しあたってやることといえば、結局、汚染問題ていどで民衆と連帯することでしょうが、それですら、具体的にやったら大変に難しい問題ですね。『ていど』と言っては悪いかもしれませんが事実そうです。」（85頁）

「＊＊君のやっている『世直し』のような運動にしても民衆とコンタクトしているかどうかは、全く疑問ですよ。あれも単に＊＊君と仲間の人たちが集まって、ビラを作ったり集会をしたりしているけれども、民衆自体とは何の関係もないと思いますよ。ですから、民衆とはいっさい関係のない場所で発言する以外にありませんね。そのような形で民衆の目に入って、問題解決のための、ある端緒を分からせる以外には方法はないですね。民衆と相談して始めようとすれば、永久に相談なんかまとまらないし、始めることなどできないでしょう。」（85-6頁）その上で、森は、フランス大革命やロシア革命が、当時のブルジョア不平分子が勝手にやってしまったことだと捉え（86頁）、次のように、指摘している。すなわち、「これは大変に難しい問題であるけれども、私は、民衆というものは本来存在しないと思うのですよ。つまり、これが民衆だと言って、指し示すものがなにもない、つまり存在しないと同じことです。」（86頁）、と。

地域的な住民運動について問われた森は、次のように答えている。すなわち、「それも、住民の意思でやっていくとか何とか言うけれども、本当は、そこに数人の運動者がいて彼らが住民を糾合してやっていくわけだけれども、悪くすると、周りからのさまざまな圧力が強くなるに従って、住民たちは、一人抜け、二人抜けして、しまいには数人の運動者だけが残るということになってしまいます。そうなってしまえば『住民の利益のため』とは言っても、その『住民』は存在しなかったのだ、という以外になくなってしまいますよ。こういう結果は実に多くの場合に見られるはずです。反対住民の結束も、おどしたり、『お金をこれだけあげます』と言えば、そちら側に簡単について行ってしまうこともありますね。もともと存在しないものが、存在しているもののような顔をしたり、振る舞ったりするから、何か事が起こった時には、皆逃げていってしまう

んです。」(87-8 頁)

しかし、民衆が存在しないと言うことは、森にとっても、重大な問題である。彼は、主張する。「民衆が存在しないというのは大変な問題です。物理的に最大多数を占めているのはほかならぬ民衆なのですが、何か重大事が起こった時に、民衆としての一貫した抵抗があるかどうかが問題なのですから。つまり、存在とは抵抗が存在するということであって、抵抗のない存在はないんですからね。民衆が存在するというのは、民衆の中に一貫した抵抗が存在する、ということなんですね。」(88 頁)、と。

また、民衆が知識人の意識の中についに存在する余地はないのか、と問われた森は、次のように答えている。「もし仮に、数人の知識人がいるとすれば、その数人こそ、本当の民衆なんですよ。数人の知識人が、民衆のことを考えて、民衆のために発言することが、『民衆』なのであって、その辺を歩いているおじさんやおばさんに民衆を見ることはできないんです。民衆としての存在性を持っていない。ただ、数人の本当の『民衆』がいるために、たくさんの人が、民衆としての姿を現わしてくるだけの話であって、しかし最後には、数人の人が、民衆と思っているものに突然、裏切られてしまうわけですからね。存在としての『民衆』という意識は、わずか数人の心ある人が持っているのであって、デモクラシーなんていうものはこの世の世界にあり得ないことです。デモクラシーを構成している大多数が実は存在しないのですから。」(89 頁)、と。

これは、憲法上民主主義を採用している諸国民、特に、日本人にとって重大な問題である。森は、語る。「これは実に根本的な問題ですがね。浮動している一般的な民衆だって、本当の人間、本当の抵抗のある民衆存在となりうる素地をみな持っているわけなんだけれど、そこまで行くのがなかなか大変なんですね。」(89 頁)

これに対して、インタヴュアーは、問い続ける。すなわち、日本の状況の中で本当に抵抗を持った民衆である知識人が、発言する側から更に進んで、行為としての抵抗の意識、政治的自己を発見し、自覚しうるような知識人が、生まれてくると思うのか、と。これに対して森は、「そのような人は、出てくるならば、出てくるんであって、ただ待っていても永久に出てこないかもしれませんよ。こちらがどんなにイヤでも出てくるでしょうから。だいたい、出てくれば、皆に嫌がられるに決まっているんですから。普通の人は、皆に嫌がられる者になりたくはないから、運動家には絶対にならないでしょう。だいいち、そのような人は、容易には、民衆から歓迎などされないし、絶対に民衆に媚びたりもしないはずです。」(89-90 頁)

更に、森が発言した「私は知識人などは信用しません」という言葉の真意を尋ねられた森は、次のように答えている。「確かに、日本人というのは、おおよそ知識人になるために一番根本的な傾向が違う人種・タイプに属していると考えますから。知識人を出すような民族じゃないのですよ。根本的な点というのは、『知的』な面で、日本人ほど怠け者はいないということですよ。知的怠け者は知識人にはなれっこありません。・・・『考える』ことをやらない。考えない人間が知識人になることはできない・・・知識人は、読者が欲しがらなくても、いる時はいるんですか

らね。どうも日本人は、要求から先に出て、空中楼閣を描く傾向がありますね。」（90頁）、と。

その上、「『知』とは何か」と問われて、森は答える。「言うまでもなくまめに注意を働かせること、すべての事柄に対して、実際にそうであるのかどうかを吟味して確かめて、その上で行動する、というのが知識の本質ですからね。物事を確かめるためには 自分が動き回らなければならないし、問題が起これば、その現場へ行かねばならないし、必要とあらば関わりある人から話を聞かねばならないし、非常にたくさんのすることがあるんです。・・・注意力と行動力がなければ知識は構成されないものなのです。日本人は、この点で怠け者なのですからね。みんな、人から聞いた話で間に合わせているわけですよ。そんなのは知識じゃなくて、噂話を蓄積しているにすぎないのですね。現代の日本は、すべて確かめなければならないことだらけのはずですよ。」（92-3頁）、と回答した上で、「松川事件」の広津和郎さんや「教化書裁判」の家永三郎さんを知的活動家、すなわち、知識人の例として森は指摘している（93頁）。

しかも、森は、世界の、特に、日本の現状について悲観的である。「明治とか大正といった、或る意味で古い慣習やしきたりの中で不自由に育った方たちの方が、本当の自由のために行動する知識人のタイプに近い」（93頁）、と考える森は、世界の若者達も消極的である、と見ている。森は、言う。「残念ながら、私は今の若い方々に対しても何の希望もありません。日本ばかりでなくフランスでも毎日若い学生に会っていますけれど、全く希望など持てる状態ではありませんね。」（94頁）その上、ジョンソンとは異なり、現存する世界の知識人の中で、何と言っても、Ｊ＝Ｐ・サルトルを現代の代表的個性と見ることには異論はないと考え、「森が彼の思想のどの部分に興味を持つか」と尋ねる質問者に対する彼の答えは、以下のような事である。「やはりアンガージュマンの思想でしょうね。特に、人間の自由と責任の問題に対して私は根本的な共鳴を持ちますね。私の『経験』という考え方と『アンガージュマン』の思想とは、考えの出てくる地盤が違いますから、それほど関係がないのですが、関係が無いとも言えない。アンガージュマンは経験の中から出てきますが、経験そのものがアンガージュマンとは言い切れない。しかし、ある意味で経験はアンガージュマンですよ。」（91頁）、と答え、両者に共通するものが、自由と責任である事を示唆している。

最後に、森は、日本の知識人と思しき人ないし知識人に対して、次のような要望を述べる。すなわち、「本当の知識人には、やることが山ほどあるはずですよ。わずらわしいこの世の中を作りだしたのもやっぱり人間なのであって、ひとりひとりがやることを怠ったり、努力することをしなかったならば、社会はまったくの闇になってしまいますね。・・・道を歩いて途中で止まったのでは、いつまでも目的地に到着しないので、いつかは最後まで歩かなければならないのですから。しかも真面目に考えて生きようとすれば、やることがあまりにも多くて時間がない。寸秒の時間も惜しまれるんですね。」（96-8頁）、と答えて、日本と世界の諸問題を解決するために知識人に対して、不倒不屈の精神を持って不断の努力をする事を求めているのである。

V 結 論

以上のように、筆者は、主として、ポール・ジョンソンが例示している知識人の中から、ジャン＝ジャック・ルソー、カール・マルクス、バートランド・ラッセル、ジャン＝ポール・サルトルの４人、エドワード・W. サイードが挙げている者の中から、アントニオ・グラムシ、ジュリアン・バンダ、ミッシェル・フーコー、アルヴィン・グールドナー、ツルゲーネフの『感情教育』に登場する、バザーロフ、ジョイスが描く、若きヒーロー、スティーヴン・ディーグラス、フロベールの『感情教育』の登場人物の一人であるバザーロフの７人を取り上げ、これらにサイード自身と森　有正 の見解を加えて、彼らの知識人論を見てきた。

ジョンソンの場合、私生活まで含めてその人間像を明らかにしているが、他の二人は、主として公的な側面を検討している。これらの知識人の中で、ジョンソンの場合、普遍性をそれほど求めていないのに対し、サイードと森の場合は、現場を自分の目で見、分析し、慎重に確かめた上で、普遍性を持つ人類の一員として行動する事を知識人の要件としている。しかも、森の場合、独特の「経験」という概念が、その見解の根底にある。また、サイードが、これまでの生き方から来るのか、知識人の公的役割をアウトサイダーと「アマチュア」に求めるのに対して、森は、日本に根拠地を持ち、重大な問題が起こった時に、万難を排して行動する勇気ある知者である。

また、小田　実との対談の時に、「知識人の課題」いう標題の所で、その定義を問われた森は、知識人の事を「私はあらゆる段階の意味で，そういうふうな仕事（「歴史とか社会とかそういうものに対する心理であっても、あるいは論理であってもあらゆるそういうかなり掘り下げられた知識をもった人たちが、その問題に協力して、日本の歴史の一般化というものをとにかくなしとげる必要があると思うのです。」）をして、日本の本当の民主化というものに貢献する人を、知識人と呼びたいと思うのです。それと同じように、日本の問題を一般の地平にひき降ろして、そこに本当の民主主義の、一般の地平の上から建設できるような仕事、そういう任務にたずさわる、ことに意識してたずさわる人間を知識人と呼びたいと思いますが、どうでしょうか。そうすることによって、知識人、日本の知識人にとって本質的な役割というものが明確になってくるんじゃないでしょうか。」[12]、と定義している。

森は、続ける。「ただなんとなくイデオロギー的なものに動かされて、ただ議論をしているだけじゃなくて、もう少し地味な、共同の仕事という相を帯びてくると思うのです。天皇制の問題にしても、日本の社会に独得といわれる社会構造の問題にしても、特別な新日本人的な心理にしても、日本人的なということでは問題が解決したと思っているのですよ。それはそうでなくて、日本人的というのは、一般的なもののある特定な偏向に対してつけた名前ですから、非常に不十分なもので、名前をつけるのは、それ以外名前をつけることができなくなった場合につけるものなので、まだ研究の余地のあるものに符号的な名前をつけて、それで、何かが確立できたらと思ったら、これは非常に安易なことだと思うのです。その意味でぼくはやはりあくまで、日本の社会

の合理的分析と、それの整理というものが根本的に必要で、それをさらに一般大衆の知識的所有の中まで普及化しなければならないと思うのです。その仕事をするのは、やはり知識人だと思うのです。ことに知識人の役割の主なものじゃないでしょうか。」（168-9頁）

これまで取り上げた論者は、いずれも知識人を現状批判的な存在と見ている。筆者も、これに賛同する。但し、これらの要件に加えて、サイードと森の二人が暗黙の内に示唆しているように、どんなに自分に不都合な事であっても、事実を事実として同等な第三者の立場に立って認める、研究者に求められると同様な条件を付け加えたい。事実の精確な把握無くして、いかなる有効な言動も生まれないからである。周囲を見渡しても、国内を見ても、世界全体を一瞥しても、この要件に該当する人物は、極めて少ないように思われる。世界の現状を考える時、地球大の諸問題が山積している――温暖化や自然の破壊、内戦に伴う飢饉、自然的・人的災害、自殺、凶悪犯罪、生活条件の諸格差、民族紛争、戦争、核兵器の拡散、自国の利益への固執、同じような事でも相手にする国によって規準を使い分ける、いわゆるダブル・スタンダードを適用する大国の政策など――に鑑みて、これを要求するのは厳しいかもしれないが、少しでも多くの、最終的には、自らの命をも掛けることができる、より多くの民衆の知識人化が求められているように思われるのである。無論、これは、極めて困難な茨の道である[13]。そうしなければ、森が別の著書で述べているように、人類は、後何百年も生存し続ける事は、できないであろう。森は、1967年6月9日付けの日記の中で、アラブ諸国とイスラエル、ヴェトナム戦争などに言及した後に、予言者的に断言している。

「真の破局の機はまだ熟していないらしい。しかしそれは、早かれ遅かれ、ある日やってくるであろう。しかしまだその時は来ていない。私達が生きているこの世界は、ある日、計り知れないカタストロフによって終末するだろう。それは太陽のように確実だ。人間は悪い。私は私もその一人である人間に何らの信頼ももっていない。どうして人類が恐るべき災禍の中に終らぬことがあろうか。これを疑うものは、人類の『悪』を認知することをしらない、おめでたい連中に過ぎない。それは、少なくともこれで人類がやがて進化して地上天国を築くことを信ずるよりもはるかに現実的である。」[14]

しかも、森は、別の著書の中で、日本に関して次のように述べている。それは、ある若いフランス人女性との大学内の食堂での事である。森は、語る。「かの女は急に頭をあげて、殆ど一人言のように言った。『第3発目の原子爆弾はまた日本の上へ落ちると思います。』とっさのことで私はすぐには何も答えなかったが、しばらくしても私はその言葉を否定することが出来なかった。それは私自身第3発目が日本へ落ちるだろうと信じていたからではない。ただ私は，このうら若い外人の女性が何百、何千の外人が日本で暮らしていて感じていて口に出さないでいることを、口に出してしまったのだということが余りにもはっきり分かったからである。かの女は政治的関心はなく、読書も趣味も友人も、ごく当たり前の娘さんである。まして人種的偏見なぞ皆無である。感じたままを衝動的に口にしただけなのである。胸を掻きむしりたくなるようなことがこの

日本で起り、そして進行しているのである。彼女がそう言ったあと、私は放心したように、大学構内の木々が日の光を浴びて輝くのを眺めていた。」(15)

最後に、筆者自身の現代知識人の定義をしておきたい。すなわち、それは、「日常生活を営みながら、一旦重大な事件や事故が発生した場合、可能ならば、その現場に馳せ参じ、細心の注意を払って情報を収集･分析し、その原因を解明し、自己の知識･思惟に裏付けられた自分の見解を、自分の利益のためではなく、社会や世界全体――特に社会的弱者――のために、何者にも拘束されない人類の同等な一員として、諸問題を解決するために最も適切な発言をし、極めて慎重に行動しつつも、結果的には、死に至るかもしれない事を恐れず、できるだけ、志を同じくする人達と連帯して、あらゆる行動を起こす者である。」、と。こうした知識人が増えないことには、人類の未来は暗澹たるのものになるであろう。

注

(1) アラン・ド・リベラ・阿部一智・永井　潤訳『中世知識人の肖像』、新評論、1994年、159頁。以下、本書からの引用箇所は、本文中の括弧内に示す。
(2) アーサー・G・ギィシュ・榊原　巌訳『新左翼とキリスト教ラディカリズム』、平凡社、1973　年、78-9頁。
(3) ジョゼフ・ラウズ・成定　薫/網屋裕一/阿曽沼明裕訳『知識と権力　クーン/ハイデガー/フーコー』、法政大学出版局、2000年、39頁。
(4) 同上書、260-1頁。
(5) L．コーザー・高橋　徹監訳『知識人と社会』、培風館、1970年、i-iii頁。
(6) カレル・ヴァン・ウォルフレン『日本の知識人』、窓社、1995年、3-4頁。
(7) 同上書、4-5頁。
(8) ポール・ジョンソン・別宮貞徳訳『インテレクチュアルズ』、株式会社共同通信社、1990年、11頁。以下、本書からの引用箇所は、本文中の括弧内に頁数のみ示す。
(9) エドワード・W・サイード・大橋洋一訳『知識人とは何か』、平凡社、1995年、23頁。以下、本書からの引用箇所は、本文中の括弧内に頁数のみ示す。
(10) 歴史の捏造に対する知識人の責任については、例えば、加藤　節『政治と知識人――同時代史的考察――』、岩波書店、1995年、18頁参照。
(11) 森　有正『遠ざかるノートル・ダム』、筑摩書房、1976年、　81-2頁。以下、本書中の引用箇所は、本文中の括弧内に頁数のみ示す。
(12) 森有　正＊小田実『対談　人間の原理を求めて　揺れ動く世界に立って』、筑摩書房、1971年、168頁。本書からの引用箇所は、本文中の括弧内に頁数のみ示す。
(13) 森の経験に基づく政治思想については、例えば、筆者の次の二つの論文を参照されたい。
　1．「森　有正の現代日本政治観」、『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』、第52巻、2001年、81-104頁。
　2．「森　有正と政治改革」、同上誌、第53巻、2002年、75-88頁。
(14) 森『砂漠に向かって』、筑摩書房、1967年、217頁。
(15) 森『木々は浴びて』、筑摩書房、1972年、69頁。

（2008年4月30日　脱稿）